

ドイツ・レーゲンスブルクの図書館事情

－アフターコロナの在外研究－

法学部 教養・基礎教育部門 教授 黒 沢 宏 和

1. はじめに

私は2022年4月1日から2023年3月31日までの1年間、ドイツ連邦共和国レーゲンスブルク大学言語・文学・文化学部ドイツ文学科ドイツ語学講座のパウル・レSSLラー教授の下で、客員研究員として在外研究を行った。前回のレーゲンスブルク滞在は、2006年10月から2007年9月だったので、実に15年ぶりの長期滞在となった。この間、大学を含めこの町の変貌ぶりに少なからず驚かされた。

ドイツ南西部に位置するレーゲンスブルクは、バイエルン州に属し、人口は約15万人。13世紀～19世紀に建てられたゴシック様式の大聖堂（ドーム）と、12世紀に造られたドナウ川に架かる石橋が特に有名である。2006年、旧市街（Altstadt）とシュタットアムホーフ（Stadtamhof：石橋を渡った対岸に位置するドナウ川の中州）が世界遺産に登録された。中世の面影を色濃く残すバイエルン州の古都レーゲンスブルクは、世界各国から訪れる観光客を魅了してやまない。主要な名所旧跡は一日で、すべて歩いて見学できるのもその魅力の一つとなっている。

2. コロナ禍の状況

次に、コロナ禍をめぐる状況を述べておきたい。2022年4月の段階で、コロナの感染者数はドイツの方が日本よりもはるかに多いものの、マスクを着用している人は既に稀であった。公共の施設や乗り物、例えば市役所や病院、電車・バス等ではマスク着用が義務づけられていた。入館や乗車の直前にマスクを着用し、退館や下車後、直ちにマスクを外す光景を目にした時、文化の違いを垣間見た

ような気がした。規則がなくとも、外出時には自主的にマスクを着用する日本人とは大きな違いである。

さてレーゲンスブルク大学では、2022年度夏学期より基本的にすべての授業が対面となった。大学の構内ではマスク着用が推奨されていた。ただし、マスクを着用しているのは一部の教員や職員のみで、ほとんどの学生は大学へ通うバスに乗る時だけマスクを着用していた。

市内では、コンテナ製のコロナ簡易無料抗体検査所（Corona-Schnelltest）があちこちに見られたが、夏を過ぎ秋になるといつの間にかなくなっていた。このことからドイツでは、日本より一足先にアフターコロナ期に入ったことが窺えた。

3. レーゲンスブルク市内の図書館事情

上記のような状況の下、私は在外研修中レーゲンスブルク市内の三つの図書館を利用して頂いた。

1. 大学図書館
(Universitätsbibliothek Regensburg)
2. 州立図書館
(Staatliche Bibliothek Regensburg)
3. 東および南東ヨーロッパ研究拠点の図書館
(Bibliothek im Wissenschaftszentrum Ost- und Südosteuropa)

以下、個別に紹介する。

3. 1 大学図書館

大学図書館は、中央図書館（Zentralbibliothek）と幾つもの専門図書館（Teilbibliothek）から成る。端的に言えば、それぞれの学科

(Institut) が専門図書館を所有している。そして幾つかの近隣の学科ごとに、開架式の閲覧室 (Lesesaal) としてまとめられており、大変便利である。私の専門のドイツ語学の文献は、語学や文学を一括した閲覧室にあり、そこには言語学 (印欧語学・一般言語学)、古典文学・語学、ドイツ文学・語学、英文学・語学、ロマンス文学・語学、スラブ文学・語学等の諸分野に関する文献や様々な言語の辞書が所蔵されている。天井の高い伸び伸びとした空間でゆっくりとした雰囲気の中で研究ができる。

この大学図書館は、コロナ禍の影響と相俟って大きく変化していた。第一に、レーゲンスブルクのあるバイエルン州では、4月中旬より講義が開始される。以前は講義期間になると、授業の予習・復習をする学生が図書館に押し寄せた。長期休暇中ならば、ゆっくりと調べものやコピーができるのだが、多くの学生が押し寄せると自分が探している本を他の学生が利用していたり、コピー機の前に長蛇の列ができた。ところが、今回の滞在では講義期間が始まって一向に学生は戻ってこなかった。

知人にこのことを聞いてみると、今でも図書館は入館制限をしている為ではないか、という答えだった。なるほど、入館時にはカードを受け取り、退館時にはそのカードを返却するシステムとなっており、一定数を超えると入館はできないようである。しかしながら、私には2年間に亘るコロナ禍の影響で、オンライン授業に慣れた学生達が対面授業が復活しても図書館を利用する習慣が身につけていないからではと思われた。学生の利用者が少ないこの状況は、2022年度後期の授業が始まって変わらなかった。図書館が空いているのは大変有り難いが、大学教員の目から見ると極めて残念な状況であった。もうしばらくして、コロナが完全に終わり、学生が早く図書館に戻って来ることを期待する次第である。ただしこの現象は、レーゲンスブルク大学の大学図書館のみならず、国内外を問わず

全国の大学図書館にあてはまるのかもしれない。

第二に、人と接触しない図書の貸し出し (kontaktlose Ausleihe) というシステムである。ずっと以前から Web 上で OPAC を通じて図書館の本を予約することはできた。日本よりも一足先にコロナが蔓延したドイツでは、人との接触を如何にして回避するかが急務となった。そこで考え出されたのがこの「人と接触しない貸し出し」である。まず、必要な図書を OPAC にて予約する。次に、図書館からメールが届く。そのメールには、予約した本がいつから貸し出し可能なかが記されている。大抵は予約した翌日から貸し出し可能となる。最後に、中央図書館の「人と接触しない図書の貸し出し」コーナーに行く。入口を入ると、そこには多くの書架が並んでいて、書架にはアルファベットが付されている。利用者は自分の名前の頭文字の付された書架へ行き、さらにアルファベット順に自分が予約した本を見つけ出す。私 (黒沢) ならば、最初に K の書架へ行き、その中で今度は U を、次に R をとといった具合に探して行く。このようにして予約した本を手に取り、出口から退出する。こうして、誰とも接触することなく図書を借りることができる。

一般に、開架の図書の貸し出し期限は2週間、閉架の図書のそれは1ヶ月である。ただし、閉架図書の場合、他の人の予約が入らなければ、最長3ヶ月まで延長することができる。

読み終わった図書は、期限内に「人と接触しない図書の貸し出し」コーナーに持参する。出口付近に返却コーナーがあり、そこに借りた本を返却すれば、すべてが終了する。

さて、「人と接触しない図書の貸し出し」であるが、私には二つの問題があるように思われる。まず、セキュリティ上の問題である。貸し出しコーナーに入室する際、チェックは全くない。しかも利用者以外、誰もいない。図書館の職員がいることは稀である。このような状況下では、他人が予約した本を持って

行くことも可能である。

次に、「人と接触しない図書の貸し出し」コーナーの開室時間である。中央図書館や他の専門図書館では、所によってまちまちであるが、8時や8時半には開館する。ところが、このコーナーはようやく10時になってから開館となる。9時50分位になると、コーナーの前には10数人の利用者がいつも開室を待っていた。

続いて大学図書館の三つ目の変化である。その変化とは、コピー機の撤去である。この変化に関しては、コロナ禍は直接関係ないかもしれない。

私の前回の長期滞在では、文学・語学系の専門図書館には5台程度のコピー機があり、学生がコピー機を使用していない時間帯を見計らっては、貴重な文献をせっせとコピーしていたものである。

ところが、今回の滞在では以前コピー機があった場所は、図書館職員の休憩室となっており、コピー機が全く見当たらない。そこで職員に聞いてみたところ、コピー機は階下の入口付近に一台あるのみだという。その情報を手掛かりに行ってみると、確かに一台のコピー機があった。ただし、そのコピー機を使用するには事前に計算機センター（Rechenzentrum；本学で言えばKUDOSに相当）に登録した人しか使用できず、以前のような小銭を投入してのコピーはできないという。まさに今昔の感に堪えない。仕方がないので、私は図書館に設置してある大型のスキャン機で図書をスキャンし、USBに保存した。この方法だと大量の紙と日本へ輸送費の節約にはなるが、スキャンしたデータをPCのスクリーン上で見るのは、老眼の目にはやや酷である。

3.2 州立図書館

州立図書館は、旧市街の交通至便な所に位置している。私の自宅（大学のゲストハウス）からは徒歩で5分程度の距離に位置している。この図書館に所蔵している図書も大学図書館のOPACで検索が可能である。私は時折、大

学図書館のOPACで検索した結果、貸し出し中であった図書を、この州立図書館で借りていた。大学図書館の利用カードがあれば、州立図書館も利用できる。

この図書館は、大学生・研究者向けというよりも、一般市民向けの図書館である。常に多くの市民が集い、新聞や雑誌を読んでいた。常に席は半数以上埋め尽くされていた。特に夏場は、冷房施設がない為、この図書館で研究しようという気分にはなれなかった。

3.3 東および南東ヨーロッパ研究拠点の図書館

この図書館は、レーゲンスブルク中央駅から徒歩5分程度の交通至便な所に位置している。この図書館のある建物は、旧税務署であり、現税務署は大学のすぐ近くへと移転した。前回の長期滞在の際は、まだ税務署として使用されていた。税務署が移転した後、その建物をレーゲンスブルク大学が引き継いだそうである。その結果、現在はこの建物の中には様々な分野の研究所等が混在しており、東ヨーロッパ研究の拠点となっている。私がお世話になったドイツ語学講座もワンフロアを所有しており、私は客員研究員用の部屋を研究室として一年間借用した。

この建物の1階に図書館がある。図書館の名前が示している通り、東ヨーロッパや南東ヨーロッパに関する文献が所蔵されている。こじんまりとした図書館で、さながら日本の中学校や高校の図書室を彷彿させるような風情である。残念ながら私が必要とする文献はほとんど所蔵されていなかった。

この図書館も一般市民に開放されている。しかしながら、東および南東ヨーロッパに特化した図書館なので、利用は一部の研究者に限られていた。ところが、ロシアのウクライナ侵攻によって、レーゲンスブルクにもウクライナから難を逃れてくる人の数は少なくなかった。帰国が近づいた2023年3月初旬、久しぶりに図書館を覗いてみると、多くのウクライナ人の姿がそこにはあった。ウクライナ

侵攻の余波がバイエルンの地方都市にまで波及していた。

4. 謝辞

以上のように、レーゲンスブルク市内の三つの図書館を自由に活用しながら、充実した研究生活を送ることができた。最後に、在外研究という貴重な機会を与えて下さった学校法人近畿大学に、この場を借りて心より謝意を表したい。